

# 2013年度わが国貿易収支、経常収支の見通し

2012年12月6日(木)  
一般社団法人日本貿易会

## I. 要旨

### 1. 商品別貿易の見通し(通関ベース)

#### ● 2012年度～世界経済減速と円高により輸出が減少、国内景気低迷により輸入は横ばい

輸出総額は前年度比 3.2%減の 63 兆 1,800 億円となる。震災やタイの洪水等自然災害の影響で減少した前年度(同 3.7%減)に続き、世界経済の減速や円高の影響等により 2 年連続の減少となる。内訳を見ると、輸出数量は前年度比 3.4%減、輸出価格は同 0.2%の上昇となる。

輸入総額は前年度比 0.4%増の 70 兆 100 億円となる。輸入数量は前年度比 0.6%増、輸入価格は同 0.2%の低下となる。輸入価格は国際商品市況の上昇によって前年度に 9.1%の大幅な上昇を示したが、2012 年度は食料を除く国際商品市況の下落によって若干低下することになる。

#### ● 2013年度～世界経済回復により輸出が 3 年ぶり増、国内景気持ち直しから輸入も小幅増

輸出総額は前年度比 1.3%増の 64 兆 10 億円と 3 年ぶりに増加する。輸出数量は同 1.0%増、輸出価格は同 0.3%の上昇となる。

輸入総額は前年度比 1.1%増の 70 兆 7,910 億円となる。国内景気の持ち直しに加え、年度後半には消費税率引き上げ前の駆け込み輸入も予想され、小幅ながら 4 年連続で増加する。輸入数量は同 0.9%増、輸入価格は同 0.2%の上昇となる。

### 2. 経常収支の見通し

#### ● 2012年度～経常収支は貿易・サービス収支の赤字拡大により 2 年連続で黒字縮小

経常収支は 4 兆 7,680 億円の黒字となる。貿易収支およびサービス収支の赤字がそれぞれ拡大するため、前年度に比べ黒字が縮小する。

貿易収支が輸出の減少を主因に 5 兆 7,790 億円の赤字となり、サービス収支も 2 兆 8,260 億円の赤字と 8 年ぶりの水準まで赤字が拡大、貿易・サービス収支は 8 兆 6,050 億円の赤字となる。所得収支は対外資産の増加により 14 兆 4,380 億円で黒字が拡大する。この結果、経常収支は 4 兆 7,680 億円の黒字と 2 年連続で黒字が大幅に縮小する。

#### ● 2013年度～経常収支は 3 年ぶりに黒字拡大も、水準は 2010 年度の 3 分の 1

経常収支は 5 兆 3,070 億円の黒字となる。貿易収支、サービス収支、所得収支がそれぞれ改善するが若干にとどまり、経常収支の黒字拡大も小幅なものとなる。

貿易収支は輸出入共に増加するが 5 兆 7,320 億円の赤字と若干赤字が縮小、サービス収支が 2 兆 5,600 億円の赤字となり、貿易・サービス収支は 8 兆 2,920 億円の赤字を予想。所得収支は対外資産増や緩やかな円安を背景に 14 兆 6,810 億円と高水準の黒字を持続。この結果、経常収支は 5 兆 3,070 億円の黒字と 3 年ぶりに黒字拡大も、水準は 2010 年度の 3 分の 1 にとどまる。

お問い合わせ :

一般社団法人日本貿易会 調査グループ

〒105-6106 港区浜松町 2-4-1 世界貿易センタービル 6F

Tel: 03(3435)5959 Fax: 03(3435)5979 e-mail: iar@jftc.or.jp

<http://www.jftc.or.jp> …HPより全文ご入手いただけます。

## II. 総括表

### 【 通 関 貿 易 】

	2011年度 実績		2012年度 見込み		2013年度 見通し	
	(10億円)	対前年度比増減 (伸び率)	(10億円)	対前年度比増減 (伸び率)	(10億円)	対前年度比増減 (伸び率)
<b>通関貿易収支</b>	<b>▲ 4,419</b>	<b>-9,751</b>	<b>▲ 6,830</b>	<b>-2,411</b>	<b>▲ 6,790</b>	<b>+40</b>
<b>輸 出</b>	65,281	(-3.7%)	63,180	(-3.2%)	<b>64,001</b>	<b>(1.3%)</b>
数量要因		-4.3%		-3.4%		1.0%
価格要因		0.6%		0.2%		0.3%
<b>輸 入</b>	69,700	(11.6%)	70,010	(0.4%)	<b>70,791</b>	<b>(1.1%)</b>
数量要因		2.2%		0.6%		0.9%
価格要因		9.1%		-0.2%		0.2%

### 【 経 常 収 支 】

	2011年度 実績		2012年度 見込み		2013年度 見通し	
	(10億円)	対前年度比増減 (伸び率)	(10億円)	対前年度比増減 (伸び率)	(10億円)	対前年度比増減 (伸び率)
<b>貿易・サービス収支</b>	<b>▲ 5,296</b>	<b>-10,519</b>	<b>▲ 8,605</b>	<b>-3,308</b>	<b>▲ 8,292</b>	<b>+313</b>
<b>貿易収支</b>	<b>▲ 3,470</b>	<b>-9,965</b>	<b>▲ 5,779</b>	<b>-2,309</b>	<b>▲ 5,732</b>	<b>+47</b>
輸出	62,628	(-2.8%)	60,612	(-3.2%)	<b>61,399</b>	<b>(1.3%)</b>
輸入	66,097	(14.0%)	66,391	(0.4%)	<b>67,131</b>	<b>(1.1%)</b>
<b>サービス収支</b>	<b>▲ 1,827</b>	<b>-554</b>	<b>▲ 2,826</b>	<b>-999</b>	<b>▲ 2,560</b>	<b>+266</b>
<b>所得収支</b>	14,007	+1,395	14,438	+431	<b>14,681</b>	<b>+243</b>
<b>経常移転収支</b>	<b>▲ 1,093</b>	<b>+82</b>	<b>▲ 1,066</b>	<b>+27</b>	<b>▲ 1,082</b>	<b>-16</b>
<b>経常収支</b>	<b>7,618</b>	<b>-9,042</b>	<b>4,768</b>	<b>-2,850</b>	<b>5,307</b>	<b>+539</b>

(注)金額は億円単位を四捨五入

## III. 今回見通しの特徴

貿易収支(国際収支統計ベース)は、東日本大震災やタイの洪水を背景としたサプライチェーンの混乱による輸出の減少および鉱物性燃料の急増を主因とする輸入の増加を背景に2011年度に3兆4,700億円の赤字と、1979年度以来32年ぶりの赤字に転落した。

2012年度は、欧州ソブリン債務危機の影響や、中国を中心とする新興国経済の成長テンポの鈍化によって世界経済の減速が顕著となったことに加え、円高もあり輸出が一段と減少、貿易収支は5兆7,790億円の赤字と、赤字幅は前年度に比べ一段の拡大を見込む。2013年度は、世界経済の回復や円の小幅安を背景に輸出が持ち直すが、国際商品市況の緩やかな回復、消費税率引き上げ前の駆け込み需要によって輸入も増加するため、貿易収支は5兆7,320億円の赤字と赤字幅は若干縮小するものの高止まりが続く。

当会見通しの特徴は、専門委員会参加8商社が社内外にヒアリング等を実施し、それらを商品別に積み上げて作成している点である。日本経済の実相を映す鏡である貿易動向の詳細から以下のような興味深い点が浮き彫りとなる。

まず輸出における商品・産業ごとの「光と影」である。製造業にとって「6重苦」ともいわれる厳しい環境が続くにもかかわらず、世界経済の持ち直しとともに2013年度には、高機能素材や工作機械、自動車・同部品等が輸出のけん引役となる。企業の海外展開が加速しアジアを中心に国際分業関係が深化する中で貿易構造は激変しているが、依然として日本のモノづくりの基盤のコアの部分は維持されているということだ。

一方、電気機器は減少が続く。特に、情報通信機器関連や電子部品・デバイス関連といった ICT 関連商品の足どりが重い。これら商品は、電気機器や一般機械等に散在するため分かりにくい。半導体等電子部品、電算機類、半導体等製造装置、液晶テレビ等の映像機器、スマートフォン等の通信機等を合計すると、2012 年度上半期は ICT 関連商品の減少額が輸出総額減少額の 7 割相当となった。さらに、2013 年度はスマートフォン・ブームが一服し、輸出の回復を抑える一因となる。2014 年度以降に輸出の回復が本格化するためには、これら ICT 関連商品が増加に向かうことが条件となるだろう。

輸入に関しては、日本の経済活動におけるあらゆる側面で輸入品の活用が進み輸入浸透度の上昇が顕著なことが指摘できる。特に、消費関連の一部商品が高い伸びを続けており、輸送用機器のうち自動車や、電気機器に含まれる通信機の伸び率は 3 年連続で前年度比 2 割増を上回る。自動車では欧州メーカーのエコカー減税適用車投入が注目を集め、通信機では米国メーカーや韓国メーカーのスマートフォンが人気を博した。化学製品に含まれる医薬品も 10%内外の伸びを続けている。その他に含まれるバッグ類やはき物といった身の回り品、家具等も着実に増え、さらに衣類・同付属品は高水準が続く。震災後の輸入増が契機となり徐々に市場浸透率を高めつつあるとみられる商品もある。

なお、震災後に鉱物性燃料の輸入が増加した原因である原子力発電所の稼働状況については、見通し作成時点の状況が続くとこの前提で作業を行った。

## IV.商品別貿易の見通し(通関ベース)

### 1. 輸 出

#### ◆◆◆2012年度◆◆◆

世界経済減速の影響で前年度比 3.2%減と 2 年連続の減少となる。内訳は、輸出数量が前年度比 3.4%減、輸出価格は同 0.2%の上昇となる。

商品別に見ると、輸送用機器は海運市況が低迷する船舶が減少するが、自動車・同部品が米国向けや ASEAN 向けを中心に増加に転じる。原料品は金属鉱及びびくずの急増により 3 年連続の増加となり、食料品は日本産食品に対する輸入規制の影響が薄れ増加する。

しかし、多くの商品では世界経済の減速や円高定着による国際競争力の低下を背景に減少が続く。一般機械は中国向けの減少が響き前年度に比べ減少幅が拡大する。電気機器は低調が続く一部スマートフォンやタブレット関連等で伸びが見られるが 2 年連続の減少となる。原料別製品は世界経済減速による需要減および輸出価格低下に由来する輸出先の現地調達拡大が加わり鉄鋼や非鉄金属等軒並み減少となる。さらに化学製品では国内生産設備の稼働停止や事故もあり減少が続く。

#### ◆◆◆2013年度◆◆◆

世界経済が徐々に回復し円が小幅安となることから、輸出は持ち直しに転じる。輸出総額は前年度比 1.3%の増加となり、内訳は、輸出数量が同 1.0%増、輸出価格は同 0.3%の上昇となる。

商品別では、輸送用機器が自動車および自動車の部分品の伸びに支えられ着実に増え、一般機械は原動機や金属加工機械等が伸び 3 年ぶりに増加する。原料別製品は輸出価格の上昇で増加に転じ、鉱物性燃料では国内生産設備の稼働再開で輸出余力が高まる。

一方、電気機器ではスマートフォンやタブレット関連の伸びが鈍化した後のけん引役が見当たらず 3 年連続の減少となり、化学製品は中国需要が高まる恩恵が十分に行き渡らず減少幅は縮小するも微減となる。

## 2. 輸 入

### ◆◆◆2012年度◆◆◆

日本経済の低迷を背景に前年度比 0.4%増とほぼ横ばいとなる。内訳は、輸入数量が前年度比 0.6%増、輸入価格は同 0.2%の低下となる。

商品別に見ると、前年度の大幅な輸入増の主因となった鉱物性燃料は、石炭は減少するが、LNG が高水準で増加、石油製品は国内生産設備のトラブルを背景に増加する。

輸送用機器は前年度比 24.2%増と 3 年連続の高い伸びとなる。自動車は欧州車の輸入増と日本メーカーによる逆輸入の拡大を主因に増加し、航空機類も大手航空会社と格安航空会社で機材調達と共に拡大する。電気機器は家電エコポイント終了等による一部商品の低迷にもかかわらず、スマートフォンの伸長と半導体等電子部品の着実な増加によって小幅ながら増加する。また、その他のうち、衣類・同付属品は前年度に大きく伸びた反動で減少するが高水準を持続、家具、バッグ類およびはき物等の身の回り品、がん具及び遊戯用具、さらにプラスチック製品等が増加する。

一方、原料品は鉄鉱石の価格下落等のため 2 ケタの減少となる。原料別製品も国内需要の低迷を背景に減少する。化学製品は有機化合物等が減少するものの医薬品の増加が続くため小幅の減少にとどまり、食料品も小幅の減少となる。一般機械のうち電算機類(含周辺機器)はスマートフォンと競合するパソコンの市場規模が伸びず小幅減少となる。

### ◆◆◆2013年度◆◆◆

日本経済の回復および消費税率の引き上げ前の駆け込み需要によって、前年度比 1.1%増と前年度に比べ伸び率が高まる。輸入数量は前年度比 0.9%増、輸入価格は同 0.2%の上昇となる。

商品別では、化学製品が医薬品の伸びの寄与で増加に転じ、その他では衣料・同付属品や家具および身の回り品等が消費税率引き上げ前の需要増を一因に増加を続ける。一般機械のうち電算機類(含周辺機器)でも消費税率引き上げ前に需要が増加する。また、原料品は商品価格の反発を主因に、一方、食料品は穀物の価格は落ち着くものの、輸入数量が増えることで増加する。電気機器はスマートフォンの伸びが頭打ちとなるため伸びが鈍化する。

輸送用機器は、自動車の着実な増加が続くも航空機類が前年度に膨らんだ反動から減少に転じる。原料別製品では、鉄鋼が増加に転じるも非鉄金属等で国内需要の低迷が続く微減となる。鉱物性燃料も高水準ながら小幅減となる。石油製品で国内生産の増加に伴い輸入数量が減り、また、石炭は前年度比で価格が低下するため減少となる。

## V. 経常収支の見通し

### ◆◆◆2012年度◆◆◆

輸出の減少を主因に、貿易収支は 5 兆 7,790 億円に赤字幅が拡大する。サービス収支は、輸送の支払増と仲介貿易等その他営利業務の受取減を主因に 2 兆 8,260 億円の赤字と 8 年ぶりの水準まで悪化する。このため貿易・サービス収支は 8 兆 6,050 億円と 2 年連続の赤字となる。一方、所得収支は対外資産の増加により 14 兆 4,380 億円と大幅な黒字が続く。この結果、経常収支は 4 兆 7,680 億円の黒字となるが、前年度に続き黒字幅は大幅に縮小する。

### ◆◆◆2013年度◆◆◆

輸出と輸入が共に増加するが、貿易収支は 5 兆 7,320 億円の赤字と若干の改善にとどまる。サービス収支は、世界経済の持ち直しにつれ仲介貿易等が回復するため 2 兆 5,600 億円の赤字となり、このため貿易・サービス収支は 8 兆

2,920億円の赤字と高止まりが続く。所得収支は対外資産の増加や円安を背景に14兆6,810億円の黒字と微増を見込む。この結果、経常収支は5兆3,070億円となり、わずかながら3年ぶりに黒字幅が拡大するが、水準は2010年度の3分の1にとどまる。

## VI.前提条件

### 【前提条件】

	2011 実績	2012 見込み	2013 見通し
世界貿易 (暦年)	6.3 %	3.3 %	4.6 %
世界経済 (暦年・実質)	3.8 %	3.2 %	3.5 %
米 国	1.8 %	2.1 %	2.1 %
ユーロ圏	1.4 %	▲ 0.5 %	0.1 %
ア ジ ア	7.3 %	6.1 %	6.7 %
日本経済 (年度・実質)	0.0 %	0.9 %	1.5 %

(注1) アジアはIMF定義による「アジア途上国(26)」+「NIEs(4)」の計30カ国ベース。

(注2) 上記の前提条件に加え、11月中旬の外国為替市場および原油市場の動向を参考に、円相場は2012年度79円/ドル、2013年度81円/ドル、原油入着価格は2012年度111ドル/バレル、2013年度110ドル/バレルとの前提条件において積み上げ作業を実施。

以上